調査研究報告書

登校拒否児童と咬合関連症候群の異常姿勢との関係について

吉田友明（財団法人 老年歯科医学総合研究所）
森雅文（財団法人 老年歯科医学総合研究所）

1995

財団法人 姿勢研究所

登校拒否児童と咬合関連症候群の異常姿勢との関係について

財団法人　老年歯科医学総合研究所　吉田友明，森　雅文

はじめに

上顎歯列と下顎歯列の間に咬合接触関係の異常があると，顎関節部に疼痛，雑音，開口障害などの異常症状を呈することが多い．いわゆる顎関節症と呼ばれる疾病であるが，しかしそのような歯科的異常症状を示すことなく，自覚症状として頭痛，肩こり，頸腕症候群様の症状および自律神経失調症様症状などの，全身的な不定愁訴を訴え，他覚的に姿勢異常を呈する疾患がある．

われわれはこの疾患を「咬合関連症候群」と命名して診断，治療，病因，病態の研究を行い，東日本臨床整形外科学会[2,3,4,5]，老年歯科医学会[6]および全身咬合学会[7,8]などにおいて，三次元測定法，自・他覚症状，治療法，治療成績および発症のメカニズムなどについて詳細に報告した．

本症候群の発症原因は，異常咀嚼運動に由来する異常下顎位に起因するものであるから，治療としては下顎を患者本来の正しい顎位に修正することによって治癒するもである．

下顎を正しい位置に戻すためには，客観的に顎位を測定・記録する必要があるが，従来その方法がなかったので，新しい観点から著者吉田は独自に「下顎位三次元記録測定法」（以下三次元測定法と略す）[1]を開発した．その結果客観的に下顎位を表現することが可能となり，的確な診断と治療が容易となったので，「咬合関連症候群」と診断され，三次元測定法に基いて治療し，治癒する患者が増加した．

全身的不定愁訴を訴え，多方面にわたる医科的治療が奏効しないもので，当科で治療を受け，治癒した「咬合関連症候群」患者の紹介により，当研究所を訪れる者が次第に増加した．

綿密な診察の結果，咬合関連症候群と診断されたもののみに治療をおこなっているが，その年齢構成も極めて幅広くなった．

以前は歯科を受診する若年者の患者は，齲蝕（虫歯）によるものや，歯列不正が多かったが，最近になって，若年者には無縁のものと思われる中高年齢者特有の症状である易疲労性，肩凝り，腰痛などの訴えを持つものが次第に増加している．これら若年患者の訴えをさらに検討したところ，全例に「姿勢異常」に加えて社会問題となっている不登校傾向者が意外に多いことに気付いた．ここでは学童のみでは症例数が少ないので，小学生から大学生までの若年者について述べることにする．

Ⅰ　症例

年齢は 6歳より21歳までの，男性14名，女性11名，計25名である．